

『百人一首の謎』

来ぬ人を まつほの浦の 夕なぎに
焼くや藻塩の 身も焦がれつつ

権中納言定家

(現代語訳)

いくら待っても来ない恋人を毎日待っている私は、淡路島の松帆の海辺で夕なぎどきに焼いている藻塩のように、じりじりと身も焦がれる思いでいます。

作者は百人一首の選者・藤原定家です。定家はどんな意図で百首を選んだのか？ キーワードによって札を並べると地図になるとか？ 暗号が隠されているとか？ 「百人一首の謎」として、多くの本が出ています。

また、定家はなぜ自身のたくさんの歌の中からこの一首を選んだのか？ 定家は後鳥羽院に新古今集の撰者にしてもらったのに、その選定で院に盾を突き、武家の源実朝にも和歌を教えて親しくし、院を怒らせてしまいました。

とうとう許されぬまま、やがて、鎌倉三代将軍になった実朝が暗殺された隙に、院は承久の乱を起こして幕府と戦い、敗れて隠岐に島流しとなりました。

それで、「来ぬ人」は後鳥羽院で、定家がまるで恋人を待つ女性のように院を待ち焦がれていると暗に伝えたかったとか？ 隠岐の荒い波風を「夕なぎ」のように穏やかにしたいと願ったとか？

他にも、まだまだ、謎解きは続きます。

山陽小野田かるた協会 久保 久美子